



「なぜミステリが好きなのか？」

Q、ミステリに出会ったのはいつですか？

大村： 小学校6年生のときです。アガサ・クリスティー著『アクロイド殺し』（★933ア）が私の読んだ最初の大人向けミステリです。（「第2回 ミステリの女王 アガサ・クリスティー」参照） 小学校低学年の時、姉が読み聞かせてくれた南洋一郎訳の『怪奇な家』（怪盗ルパン中の作品 モーリス・ルブラン作）で、ミステリに魅せられたのをきっかけに、子ども向けの江戸川乱歩「少年探偵団シリーズ」や「怪盗ルパンもの」（★953R 1～25『アルセーヌ＝ルパン全集 1～25』偕成社）を読んでいました。しかし、『アクロイド殺し』を読んだことで、よく考えられたトリックや巧みにはりめぐらされた伏線に感動し、ミステリの本当の素晴らしさを知りました。

Q、そのことで、ミステリ好きになったのですか？

大村： それまでにない面白さでした。そういえば、小学校のとき友人3人で読書サークル「樽(たる)会」を作り活動していました。「樽」とはクロフツ(フリーマン・ウィルス・クロフツ「第5回 その他黄金期の作家たち」で扱う予定)の代表作『樽』（★933カ）にちなんで名づけたものです。

Q、小学生のときから、読書家だったんですね。

大村： いえいえ、野原で野球ばっかりしていましたよ。中学のときに、テレビで「刑事コロンボ」の放送が始まりました。コロンボが犯人を追いつめる論理や手がかりが感動的で、放送を見逃さないよう、必死でした。見逃したものは二見書房の小説版コロンボでフォローしていました。

高校のときは、カー（「第4回 密室の巨匠ジョン・ディクソン・カー」で扱う予定）や、横溝正史にもワクワクしたなあ。当時ミステリは文学作品ではないといって低く見られる傾向があり、学校図書館にもミステリは少ししかありませんでした。今も、同じ考えをしている方もいますよ。

習志野高校図書館にはたくさんあって、読めるからうらやましい。ぜひ高校生の皆さんも読んでください。これからも、面白いミステリをたくさん紹介しますからね。映画やテレビになった作品も数多くありますよ。

Q、昭和30年代には、ミステリの主流が変化したのですか？

大村： 社会派ミステリ（推理）といいます。昭和30年代に一大ブームがありました。松本清張がその象徴です。現実的であることがよいとされ、企業犯罪や動機の説得力などが重視されました。そのため現実離れしたトリックや仕掛けなどを主眼とした古いタイプのミステリは、価値が低いとみなされてしまいました。しかし、平成以降はミステリ本来の面白さが再評価されるようになり、様々なタイプのミステリが幅広く受け入れられるようになってきました。



しかし、どんな読み方でも、楽しんだらいいのです。いかにドキドキしたかとか、名探偵に魅せられたとか、仕掛けのうまさに感動したかとか、プロットの意外性に驚いたとかで、ミステリを読んでいくという視点があってもいいと思います。どんな読み方をしても、ミステリの面白さは永遠不滅なのですから。

次回は、ミステリ小説についての歴史の知識を、どのように蓄積していったのか、教えてください。